

【巻頭言】

「国際化と産業界との連携強化」

エレクトロニクスソサイエティ会長

小山 二三夫 (東京工業大学)



現在国内の多くの学会が会員数の減少に悩まされていることを耳にします。エレクトロニクスソサイエティの会員数の推移(図1)は、最近では下げ止まった傾向も見られますが、特に企業会員の減少が目につきます。(2008年以前の分類データは、会員登録システム移行期間中のため総数以外は不確定)。これは、エレクトロニクスソサイエティの総合大会やソサイエティ大会の一般講演の件数(図2)にもその傾向が現れています。アカデミアからの寄与、会員数は横ばいですが、企業研究者・技術者の参画が明らかに減少しています。参考までに、IEEEの会員数推移(図3)では、米国本土は横ばいですが、中国・台湾・インドなどの新興国からの会員数が増大しています。

我が国の状況は、研究者・技術者の減少、グローバルな競争の中で企業での学会活動の余力が退潮、インターネットの浸透で情報が容易に取得可能といった環境変化など、いくつかの要因が重なっていると思われそうですが、アカデミアと産業界は両輪であり、産業界との連携強化は、必須であると思います。産業界からみたときに、学会の機能・役割をより魅力的にする必要性を痛感しています。学会の果たす役割としては、研究者・技術者同士のつながり・連携強化、研究・技術知見の実務への普及促進、研究成果の社会への発信などがありますが、特に産業界からみたときの付加価値を深化させる必要があります。これについては、ソサイエティの研究技術会議で種々の施策を検討しているところです。

また就労人口が減少局面に入った我が国においては、国

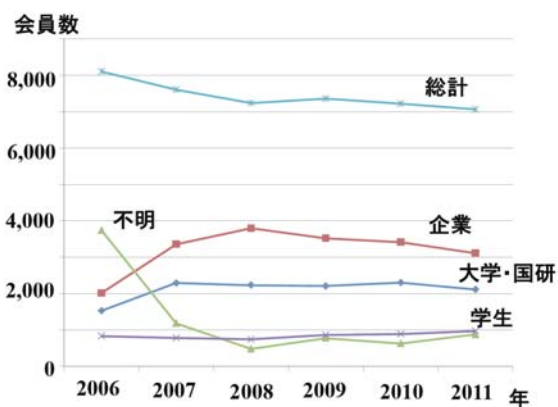


図1 エレソの会員数推移

際化促進による海外会員増が一つの方向です。電子ジャーナルとして定着した ELEX は、70%以上が海外からの投稿です。しかしながら、海外会員の本格的な増や参画を促進するためには、言語の問題は障害であり、英語版 Web の一層の充実、大会・研究会講演の英語化、運営委員会への外国人参画なども検討していかなければなりません。

難しい課題は多々ありますが、電子情報通信学会の新たな発展のため、会員各位から忌憚のないご意見、ご助言を頂きたいをお願いする次第です。

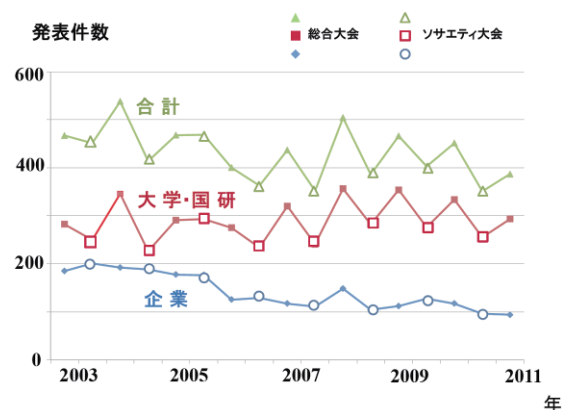


図2 エレソの大会講演数推移

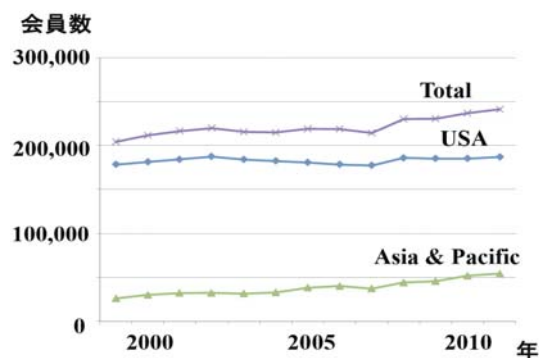


図3 IEEEの会員数の推移

http://www.ieee.org/documents/fellow_stats_region_affiliation_2010.pdf

著者略歴：昭和60年東京工業大学大学院博士課程修了。東工大精研フォトニクス集積システム研究センター教授。半導体レーザー、半導体光集積回路の研究に従事。平成2年電子情報通信学会篠原賞、論文賞受賞。平成10年丸文学術賞、平成16年市村学術賞、平成19年文部科学大臣表彰科学技術賞、平成20年IEEE/LEOS William Streifer Award、2011 MOC Award、2012応用物理学会林厳雄賞など受賞。

【巻頭言】

「全国大会、研究会、国際会議の活動の活性化に向けて」 エレクトロニクスソサイエティ副会長（研究技術担当）

浦野 正美（NTT）



本年度よりエレクトロニクスソサイエティ副会長（研究技術担当）を担当しております、NTTの浦野でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

エレクトロニクスソサイエティには、15個の研究専門委員会（平成23年度からの新設2件含む）、8個の時限研究専門委員会および5個の国際会議国内委員会があります。研究技術会議は、各研究専門委員会、国内委員会の委員長および庶務・財務幹事2名、技術渉外幹事2名、大会運営委員長、大会運営幹事および担当副会長の計35名がメンバーとなり、年5回開催されています。

電子情報通信学会の主な活動として、全国大会（総合大会、ソサイエティ大会）、研究会、論文誌、国際会議があげられます。研究技術会議はこのうち、全国大会、研究会、国際会議の活動を支援し、活性化させるための会議です。主な担務としては、研究専門委員会の新設、継続および廃止の審議、国際会議の主催、共同主催、共催、協賛、後援の審議、総合大会やソサイエティ大会の運営を行っています。さらに、研究会活性化のための企画への支援や研究専門委員会のホームページの作成支援、国際会議運営における支援、総合大会やソサイエティ大会の企画に対する依頼講演への支援等の各種制度を制定し、運用しています。

これまでのニュースレターでも、小山エレソ会長をはじめとする皆様が書かれているように、近年エレソ会員は減少傾向にあります。特に企業の研究者・技術者の学会への参加促進が課題となっています。研究技術会議では今年度検討を進め、新規に企業の会員に対する参加促進策を実施することとしました。企業の研究者・技術者にとってもより魅力的な学会となるよう、今後も検討していきたいと思っています。

さて、読者の皆様もご存じのとおり、研究会活動は大会などに比べてより深い議論の場として活発な活動が行われてきました。これらの研究会における技術研究報告（技報）はこれまでの研究の足跡をたどるとともに、将来の研究の基礎として、高い学術的な価値を持っています。そこで、会員サービス充実の一環として、「技術研究報告アーカイブシステム（技報アーカイブ）」

(<http://www.ieice-es.jp/doc>) を昨年度より提供開始しました。学会が持つ技報という財産を有効活用していただくため、技報を電子化し、Web上で購読、ダウンロード可能なサービスとなっております。



図1. 技報アーカイブのログインページ

本年1月現在、13研究会の1993年から2008年の技報が購読、ダウンロード可能となっております。また、今年度中には紙の痛みが激しい1967年以前の手書きを含む技報について、価値保存のために先行してアップロードを行う予定です。ぜひご利用ください。

研究技術会議では、全国大会、研究会、国際会議の活動の活性化を通して魅力的な学会を実現するとともに、上記の技報アーカイブのような直接的なサービスの提供を通して会員の皆様の学会活動を支援したいと思っています。今後とも会員の皆様のご協力の程、よろしくお願いいたします。

著者略歴：

1986年上智大学理工学研究科電気電子工学専攻博士前期課程修了。同年、日本電信電話株式会社(NTT)入社。以来主に論理LSIの高速化、低電力化技術の研究開発と通信用LSIの研究開発に従事。2009年よりエレソ研究技術会議庶務・財務幹事、2011年よりエレソ副会長（研究技術担当）。